

白家の冷酷若様に転生してしまった3



灰炎

かいえん

碧玉の傍仕え。碧玉が気を許せる唯一の人物でもある。

黄夏礼

おうかれい

黄家の宗主。底意地悪い性格で、先帝とともに宮廷で碧玉に嫌がらせをしていた。

黄琥貞

おうこうちよう

黄夏礼の弟。善良な青年だが、夏礼から「石くれ」という呼び名で馬鹿にされている。

黒紫曜

こくしよう

黒家の総領息子で碧玉の幼馴染。自称「碧玉の親友」で、何かと碧玉を頼ってくる。

白碧玉

はくへきぎよく

道術を使って魔を祓う祓魔業を生業とする一族・白家の総領息子。実は、前世の記憶があり、自分が義弟に殺される運命にある小説のキャラクターだと知っている。現在は隠居中。

白天祐

はくてんゆう

白碧玉の義弟。碧玉とは従兄弟だが、祓魔の才能に恵まれていることなどを理由に白家本家の養子となる。白家の宗主。

雪瑛

せつえい

黒家を襲った九尾に仕えていた野狐。現在は碧玉の下僕として、白家で暮らしている。



目次

美女画の怪

7

泉の樽

263

# 美女画の怪

一、天祐、行方知れずとなる

黒領の天声山は雪で凍てつき、ふもとにある龍坵では、白い霧がたなびいている。その名の通り、龍が巻きついているような様だ。

龍坵は黒家の本拠地であり、その主らが住まう屋敷を、白碧玉は訪ねていた。

月の光を編んだような白銀の髪を上半分だけ結び上げ、銀製の冠でとめている。そこから鎖が伸びて、額に青い玉を垂らしていた。淡い水色の深衣に、袖が広い白い羽織をまとっている様は、碧玉の美貌もあいまって、仙人のように浮世離れして見えた。

「それで、碧玉」

なかなか口を開かない碧玉に焦れて、黒衣に身を包んだ青年が切り出す。その声音には、幼馴染らしいからかう調子がにじんでいる。

「このたびの急な訪問はどういうことだ？ お前、この前の九尾の件が片付いた後は、今後はそうそう私達とは会わないだろうと言っていなかったか？」

黒漆が美しい茶几の対面で、黒紫曜が明るい紫の目を細めてにやりとした。紫曜は碧玉と反対の色をまとっている。黒い髪を頭の上半分だけ結び上げ、銀の冠でまとめており、紫の深衣の上に黒

い毛織物を羽織っていた。印象的なのは、左目の下に縦に二つ並んだほくろだ。

「まあ、お兄様ったら、そう急かさずともよろしいでしょうに。遠方よりいらっしゃったご友人なのですから、まずはおもてなししなくては。若様、お茶をどうぞ」

この応接室は母屋から独立した造りになっており、小さな水屋が備えられている。そこで紫曜の妹である雪花が手ずから青茶を淹れ、年配の侍女が紫曜と碧玉の前に運んできた。

上等な茶葉特有の素晴らしい香りが、応接室に漂った。

雪花は湯気の向こうで、楚々とした微笑みを浮かべた。つややかな黒髪を上半分だけまとめ、冬によく似合う白梅のかんざしを挿している。白と薄青の襦裙は少女らしく、彼女の凛とした美しさを飾り立てていた。

「急な来訪にもかかわらず、気遣いに感謝する。いただこう」

碧玉は茶杯を手に取り、茶を味わった。ふくいくたる茶の香りで、碧玉の切れ長の青い目元がゆるんだが、すぐさま元の仏頂面に戻る。

昔ならばともかく、すでに隠居している碧玉は、東隣の領地である黒家にはほとんど訪れないだろうと、本気で思っていた。

碧玉の生存は公には隠しているが、数ヶ月前にあった黒家での九尾退治事件をきっかけに、黒家の一部の人間にはばれている。

事件の顛末は次のようなものだ。

黒家の宗主である黒輝が、美女に化けた黒い毛を持つ九尾の狐——実際は男——の術中にはまり、

その美女を側室として迎えた。この九尾は、黒家の先祖に封じられた妖狐で、その封印を完全に解くために、黒家の血縁者の精気を集めていたのである。

結局、九尾が黒家に仕える使用人の母子を殺したことをきっかけに、正体が暴かれた。

そして、碧玉達の活躍により、再び封じることになったのだ。

以前、黒家で宴を開いた際に地震が起きて、結界術に長けた黒家の者以外はほとんど亡くなる事件があった。その時、黒輝は親友であった白青炎——碧玉の父と妻の緑翠花を亡くし、さらに客の多くも犠牲になったことを気に病んでいた。その心の隙を九尾に利用されたのだが、碧玉が正体を明かして励ましたことで、ようやく立ち直れたのである。

そういうわけで、黒家は白家に恩義を感じており、碧玉が身を隠していることも秘密にしてくれていた。

現在の碧玉が堂々と協力を求められる、貴重な他家というわけだ。

気まずくてなかなか用件を切り出せないでいたが、意地を張っていてもしかたがないと口を開く。

「……実は、天祐が行方知れずになった」

白天祐。碧玉の義理の弟の名である。本来は碧玉の叔父の息子——従兄弟だったのだが、天祐は出産の際に母を亡くし、父まで幼少期に病ではなくなった。碧玉の父・青炎は、弟である青祥と仲が良かった。それで青炎は甥のことを憐れんで、養子として迎え入れたのだ。

これまでに様々な事件があり、今は天祐が白家宗主となり、隠居している碧玉が陰で政務を支えている。

「は？ 行方不明？」

紫曜は、ぽかんと口を開く。傍にいる雪花と侍女も、驚いて口元に手を当てた。

「……美味い」

碧玉は紫曜の間抜け面をちらと一瞥し、再び茶を飲む。

「まあ、ありがとうございます」

碧玉の褒め言葉に、雪花が礼を言う。紫曜が茶几の上に身を乗り出した。

「いやいや、のんきに茶を堪能している場合か！ 白家の宗主が行方不明とは大事だろうに」

「だから私がこうして自ら、黒家まで出向いたのではないか。だが、それと茶の良さを味わわぬのは別のこと。このような素晴らしい茶に失礼だろう」

碧玉の主張を聞いて、紫曜は我慢しきれずに口元をほころばせる。

「ああ、これは黄領の特に良い茶だな。褒めてくれたのは素直に嬉しいが……。はあ、お前のお茶好きは相変わらずだな」

「茶は私の数少ない気晴らしだ。菓子を取り合わせも素晴らしい」

碧玉のつぶやきに、雪花はにつこりしている。

「あいにくだが、碧玉」

「銀嶺だ」

「お前が雲銀嶺という仮の名を使っているのは知っているが、ここにいるのはお前の事情を知っている者のみだ。本名で構わぬだろう？」

「外では碧玉と呼ぶなよ」

碧玉は釘を刺すと、紫曜に続きを促す。

「黒家には天祐殿は来ていないぞ」

「ああ、知っている」

「探しに来たのではないのか？」

「私は出向いたと言った。紫曜、天祐は恐らく黄領にいます」

紫曜は茶杯に視線を落とし、一瞬の戸惑いを見せたものの、すぐに碧玉のほうを見た。

「この茶の黄領か？　なんだ、居場所は分かっているんじゃないか」

「そうだな」

碧玉はお茶をもう一口飲むと、茶杯を受け皿に戻す。

「紫曜、最近、黄家の先代の宗主と正室が立て続けに亡くなったのは知っているか？」

「え？　ああ、そうだな」

紫曜は急な話の転換をいぶかしむ様子を見せつつも、顎に手を当てて視線を左上にやり、思い出そうとしている。

「宗主の葬式には私が、正室の葬式には母上が、黒宗主の名代みようだいとして参列したぞ。父上はまだ遠出できるほどの体調ではないからな。そういえば、葬式の間では、天祐殿には会わなかったが……」

それがどうしたのかと、紫曜は問う。

「ああ、天祐は黄家を嫌っているから、使者を立てて済ませたと聞いている。それはひとまず横に

置いておいて。二人が亡くなった原因を聞いているか」

「急病と聞いていたが……まさか違うのか」

紫曜がげげんそうに問う。

「それは表向きの理由だ。白領には、こんな噂が流れてきた。白碧玉はくへいぎよくの怨霊にとり殺された、と」  
応接室に沈黙が落ちた。

三人の視線が碧玉に集まる。紫曜が好奇心を隠せない様子で確認する。

「まさか、本当にお前が殺したのか？」

「言うと思った。馬鹿ではないか。現宗主ならともかく、どうして私が先代の宗主をわざわざ暗殺せねばならんのだ。好色が過ぎて、場末の女郎屋で梅毒にかかり、隠居させられた愚か者だぞ」

そう言って碧玉は鼻を鳴らす。もし恨みがあつたとしても、放つていても死にそうな者に、わざわざ手出しはしない。

「現宗主というと、黄夏礼殿おうかれいか。お前がそこまで言うほど、仲が悪かったか？」

紫曜の問いに、碧玉は大きく頷く。

「昔は黄公子のことなど興味はなかったが、宮廷の件で嫌いになった。あの男の姉は、天治帝てんしの正室だ。黄公子はなぜか私を昔から嫌っていた。妃らの悪意に便乗して、嫌がらせをしてきたのだ」

「夏礼殿はどうして無事に生きているんだ？　先帝はもちろん、当時の妃は全て、天祐殿の策で皆殺しにされただろう？　お前に嫌がらせをしていたのなら夏礼殿だつて危ないはずだ」

「天祐が殺したのは、私が賜死しを受けた時に居合わせた者達だ」

「そういうことか。運良く生き延びたのだな」

「私自身、あれのことなど忘れていたが、黄家の妙な噂のせいで思い出したところだよ」

碧玉は白家の仕事にばかりかまけて、他人のことに興味がない。こんなことでもなければ忘れたままだったはずだ。

「その噂は面白おかしくこう呼ばれている。『美女画の怪』……とな」

「美女画？ 男のお前とは、なんの関係もないではないか」

紫曜の指摘に、碧玉は決まりが悪くなつて黙りこむ。自分の口から説明するのが嫌になり、後ろに控えている側近の灰炎を呼んだ。

「灰炎」

「は。黒家の若様、僭越ながら、主君に代わりまして私が説明いたします。その美女画というのは、とある刺繍師を手に入れるため、碧玉様が女装した時の姿を絵にされたものなのです」

「……は？」

今度は紫曜だけでなく、雪花と侍女の声もそろつた。

碧玉は彼らから目をそらし、開いた窓の向こうで、雪がちらちらと降る様をじつとにらんだ。



あれは白雲の地に、雪が降り始めた頃だった。

天祐が珍しく乱暴な足音を立てながら、碧玉の住まう離れにやつて来た。静けさを好む碧玉は、当然のように眉をひそめて注意する。

「なんだ、天祐。騒かしい」

「失礼します。うつ、すみません。どうしても腹が立ってしまい……」

高い背を縮めるようにして、天祐は謝った。黒髪を一つに結い上げて銀の冠でまとめ、白家らしい白の衣に、藍色を合わせている。天祐は常に剣を携え、まるで武官のような、動きやすそうな格好を好んでいる。髪の色こそ黒ではあるが、その明るく輝く瞳は、白家の血縁者に多い青色をしている。

「緊急事態か」

「いいえ。……俺にとつては緊急事態ですが、白家には問題ありません。いや、どうだろう。家臣が暴動を起こさなければ」

碧玉は茶几に移動し、向かいに座るように促す。

「要領を得ぬ。ひとまず座りなさい」

「はい」

「お茶をどうぞ、天祐殿。今日は寒いので、生姜の砂糖漬けを用意してございますぞ」

茶几の傍には火鉢が用意されており、灰炎は熱々の渋い茶と菓子を給仕する。天祐はお茶を飲むと、離れを見回す。

「兄上、寒くはありませんか。火鉢をもっと運ばせましょうか」



「不要だ。私も道士として鍛えている身、それほど寒さはこたえぬゆえ。確かに以前に比べれば弱くなったが、最近は落ち着いている」

「必要でしたら、いつでもおっしゃってください」

「うむ」

碧玉は鷹揚に頷いた。

道士は普段から修業をして、霊力が体を循環するように鍛えている。そのせいか、気温変化への耐性は高いのだ。白家が北部にあるのは、昔からこの地に修業場が多かった流れによるものだ。

「それで、何を怒っている」

「黄家の連中に腹を立てているのです」

「ふむ。確か、最近、先代の宗主と正室が立て続けに亡くなったな。お前は使者を立てただけで、葬式には顔を出さなかったはず。どちらかといえば、礼を欠いたのは天祐のほうではないのか」

天祐は首を横に振る。

「葬式に出なかったことで、俺に嫌味を言ってきたわけではありません。そもそも、兄上を死に追いやったのは先のクソ帝で、その正室が黄家出身だった。こちらが欠席する理由は、あちらもよく分かっているはずでしょう」

そういえばそうだったなと、碧玉は天治帝の正室のことを思い出す。碧玉に直接嫌がらせをしてきたのは側室だったが、側室の無礼を咎めない時点で、正室が黙認していたことを意味する。

「だが、お前は正室も呪い殺したではないか。ばれたのか？」

「いいえ！ 証拠など残しておりません。そもそも、今回の件は兄上が悪いんですよ。刺繍師のために女装などするから！」

「ぐっ。ごほっげほっ」

ちょうど茶を口に含んだところだった碧玉は、思い切りむせた。

「ああ、すみません。大丈夫ですか」

天祐が茶几を回りこみ、碧玉の背をさする。碧玉の咳が落ち着いたのを見計らい、灰炎が口を挟む。

「いったい主君の女装と黄家に、なんの関係が？」

女装の件は、黒家での九尾の狐退治後に訪れた町で、明明という刺繍師を商人から買い取るためにとった作戦だ。商人が銀髪好きだったので、碧玉が女装して誘惑し、明明を嫁にとるのをやめさせようと目論んだのである。

その時の碧玉は風邪を引いて変に気分が高揚していたから、奇抜な作戦に出たのだが……

「大ありだ、灰炎殿！ あの麗しい姿を見た絵師が美女画を描いて、黄家の親戚に売ったのだ。そしてその親戚は、黄家の好色翁に美女画を献上した」

天祐がしかめ面で説明している横で、碧玉は気分が悪くなって、袖を口に当てる。

「先代の黄宗主のことか？ 色狂いで梅毒にかかり、息子に隠居させられた愚か者の？」

「うげえ。それは何がなんでも絵を取り戻しませんと」

今にも吐きそうな顔をして、灰炎が言った。だが、天祐の話には続きがあるようだ。

「ええ。それだけでも許しがたいのに。その美女画から幽鬼が出てきて、先代と正室を祟り殺したというんです！ 兄上にそっくりな美女なので、白碧玉の怨霊だと噂になっていて……民はなんと言っていると思います？ 『美女画の怪』ですよ！」

天祐は憤然と言つて、自身の膝をこぶしで殴りつける。  
碧玉と灰炎は顔を見合わせた。

「その絵が私の女装姿を描いたものならば、的を射ているではないか」

「好色男に主君の絵が渡るなど気持ち悪いので、お亡くなりになって、嬉しくらいですよ」

碧玉は納得し、灰炎は喜ばしいことだと胸を撫でおろす。天祐は更に声を荒らげる。

「そういう問題ではありません！ 宮廷での件があるというのに、黄家の連中は、死した兄上の名声にすら鞭打とうとしているのですよ！ 許せません。俺は黄家に行つて、真相を調査してきます！」

「真冬だというのに、このような雪の中をわざわざ黄家まで行くのか？」

「ご安心を。火授祭までには戻ります」

天祐は堂々と宣言した。

火授祭とは、年始に行われる白家の祭事だ。先祖の神官が天帝から淨火を授けられたといわれている日のことで、白家の宗主が自ら祭事を執り行う。そして、領内では、あちらこちらで市が開かれ、一年で最も盛り上がる日でもあった。

碧玉としても、家族の団欒の日でもある火授祭は、天祐と過ごしたい。だが、そんなことよりも

雪の中はるばる黄家まで行くという、天祐の身を案じて質問している。ただ、それを懇切丁寧に説明できるほど、碧玉は素直ではない。

兄の心、弟知らずというのか。天祐は碧玉の問いの意味に気づいていない。

「というわけで、荷作りは青鈴に任せているので、俺は今のうちに兄上を存分に補充しておきます！」

「は？」

突然、天祐に抱え上げられ、碧玉は間の抜けた声をこぼす。その隙に、灰炎がささつと茶器と菓子盆を盆に回収し、退室の礼をして離れを出ていく。

「それでは失礼します」

「おい、待たぬか。灰炎！」

あつけにとられていたせいで、碧玉が灰炎を呼び止めた時には、すでに戸が閉まっていた。我が側近ながら、逃げ足が速すぎる。天祐はしみじみと感心した様子でつぶやく。

「灰炎殿は本当によくできた使用人ですね。空気を読めるのは良いことだ」

「お前が唐突なだけだろう！」

碧玉が文句を言ったところで、天祐は聞いていない。そのまま牀榻に運ばれ、押し倒された。

「兄上、他領では雪深い道を行かねばなりません、来月の半ばまでには帰りますから」

「黄家のことなど放っておけば良からう」

「いいえ、駄目です。白領と黄領の間には黒領があるのに、黒領を通つてここまで噂が流れてきて

いるのですよ。黄家のクソ野郎がわざとそうしたに決まっています。あいつは兄上より年上のくせに、大人げなくも兄上を敵視していたのを、俺は知ってるんですよ」

碧玉は天祐の情報網を侮っていたことに気づいた。

「私が黄夏礼に嫌われていることを、よく知っていたな」

「黄家といえば芸術。七璃<sup>ななりこ</sup>国の民は『美の黄家』と呼んでいます。そして、世にも珍しい石生<sup>いじ</sup>みの異能の持ち主です」

黄家では芸術や詩などが盛んで、琥珀<sup>こくはく</sup>壁と呼ばれる険しい山に囲まれた町を本拠地としている。彼らはそこで採れた石から絵の具や宝飾品を作り、美しい芸術品を天帝に献上していた。その才を認められ、石生みという異能を与えられたのだ。

そのため、素晴らしい芸術品を作り出し、祭壇に供えて天帝に報告すると、石や宝が手の平の中に現れるようになった。その石や宝石を売って糧<sup>かて</sup>にして、金のかかる芸術に従事してきた。彼らは高い美意識から礼儀作法や服飾、典礼にも詳しいので、宮廷で指南役をしている者も多い。

そういうわけで、若くして帝になった先の天治帝を支えるために、黄家出身の妃が正室に選ばれたのだ。

「あのクソ野郎は美に執着するあまり、兄上を目の敵にしていました。敵を知るために、他家にについてはよく調べたので分かっているんですよ」

「私が歯牙にもかけてなかったゆえに、余計にあの男が怒りを燃え上がらせたこともか？」

「兄上のその冷たさは格好いいと思います！」

天祐は目を輝かせて、碧玉を褒めた。碧玉は夏礼の姿を思い浮かべる。あまり興味がなかったせいで、記憶がぼんやりしている。

（会えば嫌味を言うくせに、私が無視すると余計に怒る、妙な男だったな）

芸術家というのは、あのような変人ばかりなのかと思った記憶がある。

「それで黄家を調査したところで、あの男が素直に謝るとは思えぬが。民が噂したことで、自分のせいではないと言うだろうよ」

「だとしても、黄家に噂を流した者がいるはずですよ。探し出して、寺で土下座させてやります」

息巻く天祐を、碧玉は呆れをこめて眺める。

（こういう時の気の短さには、白家の血を感じるな）

碧玉は自分と天祐が従兄弟であることを再認識した。

「私と天祐と共に行くというのはどうだ？」

「兄上とはいっても共にいたいですが、寒い中を旅させるのは忍びないので、どうか白家でお過ごしください」

「分かった。まったく、言い出したら聞かぬ奴だな」

こうなると、天祐は生来の頑固さを發揮して、碧玉の言うことを聞かない。黄家の連中がどうだろうと知ったことではないが、気にかかることはある。

「黄家を嫌うのは構わぬが、変に恨みを買う真似はするでないぞ」

「兄上、心配してくれるのですか。嬉しいですよ」

天祐は笑みを浮かべると、碧玉に口づけた。



まさかそのまま牀欄に直行するとは思わなかったので、碧玉は毛織の羽織や厚手の衣を重ね着していた。

それを一枚ずつ丁寧に脱がせながら、天祐は碧玉に口づけする。ふいに天祐の右手が焦れたように動き、碧玉の髪をまとめている紐を解いた。ぱらりと銀糸のような髪が落ちる。

それにつられるように、碧玉は天祐の冠を外す。こうして髪に触れるのは、家族や近い世話人くらいなので、天祐は嬉しそうに表情を緩めた。こちらに体重をかけないように配慮しながら、額からこめかみ、耳へと口づけの雨を降らす。

「兄上」

「んん」

耳殻を甘噛みしながら、天祐はささやいた。吐息が刺激になり、碧玉は思わず赤子がむずかるような声を漏らし、わずかに眉をひそめる。

「兄上って耳が弱いですよね」

「うるさい。そのような場所、普段は誰も触らぬだろう」

「触れる者がいるほうがまずいですよ。俺が暴れてもいいんですか？」

「まったく……」

かわいい弟の顔でいたいけな態度をとってみせる天祐に、碧玉は呆れた視線を向ける。

「冗談のつもりで、本気だろう。お前が暴れては困る」

「うぐっ」

碧玉はもっともらしいことを言う兄の顔をして、天祐の肩を軽く小突いた。まったく痛くないだろうに、天祐がわざとらしくうめく。二人して、そのおかしさに笑いをこぼす。たまにはこんなふうにじゃれあうのも悪くはないが、天祐という狼がこれだけで止まるわけがない。天祐は顔を碧玉の首筋に寄せ、ぺろりとなめた。

「あっ」

ゾクリと肌が粟立ち、声をこぼす。天祐はそれに気を良くしたのか、碧玉の首筋に、ちゅっちゅっちゅと口づけを続けた。

そうしながら、天祐は碧玉が身につけている最後の一枚——中衣をただけさせると、現れた素肌をするりと撫でた。肌に触れられた瞬間は、碧玉は天祐の指先の冷たさに身をすくめたが、怒っていただけあって天祐の体温はいつもより高く、すぐに肌になじんだ。

「脱がせぬのか？」

天祐は碧玉の内衣をただけさせただけで、取り去る様子がない。碧玉が問うと、天祐は首を横に振る。

「もう少し体が温まってからにしますよ。火鉢がありますけど、部屋が冷えています。俺の留守中



に寝こまれては困りますから」

天祐は過保護なことを言うが、どうせこの男に抱かれた翌日は、寝所から出られずに寝て過ごすはめになる。碧玉の頭に、そう言って茶化してやろうかという考えがよぎるが、風邪を引かせたくないという意味だと分かっている。余計なことは言わないでおいた。

「ああ、この前つけた痕が、もう消えている」

天祐は少し残念そうに言っ、碧玉の左の鎖骨に噛みついた。にぶい痛みがした後、天祐がその痕をいたわるようになめた。そして、そのまま下にずれて、胸元の肌をきつく吸う。

「んっ」

少し癩<sup>しこく</sup>だが、甘い痛みをもたらされるのにも碧玉はすっかり慣れた。

剣だこのある硬い指先が、碧玉の胸の飾りに触れる。やわやわともんだり、突起をつまんだりされるうちに、胸がじんと痺れてきた。最初の頃は胸では何も感じなかったのにと、体の変化に戸惑う。

「あっ」

胸の飾りをやわく噛まれ、碧玉の声に甘さが混じった。天祐はしばらく胸を愛撫すると、ふっと笑う。

「ああ、兄上の白い肌に、紅梅が咲きましたね」

「……うるさい」

詩的に表現されると、逆にいたたまれなくなる。碧玉とて、羞恥を感じないわけではないのだ。

天祐が碧玉の顔を覗きこんだ。

「ふふ。顔も赤い。恥ずかしいですか？」

「当たり前だろうが」

天祐の右の親指が、碧玉の下唇に触れる。このどうしようもない気持ちを逃がそうと、碧玉はその親指に噛みついた。

「……っ」

びっくりした様子で、天祐がこちらを凝視する。

「な、なんだ」

碧玉が天祐の指を甘噛みしたままもごと問うと、天祐の目がすわった。

「……まずい」

碧玉は自分がやらかしたことを悟った。

「兄上、あんまりかわいい真似をしないでください。今日は余裕がないので」

天祐は右手の親指をゆっくりと引くと、手早く衣の上を脱いだ。たくましい裸体がさらされる。それから碧玉の下着を脱がせた。新雪のような白い足が現れる。天祐はぐくりと喉を鳴らすと、碧玉の膝に手をかけ、性急に割り開く。

体への愛撫もそこに、天祐は牀<sup>しよく</sup>脇にある小さな几<sup>つくえ</sup>の引き出しを開け、香油を取り出す。中身を手に垂らして、碧玉の秘めた場所に触れた。

「……っ」

手の平で温めた香油でも、冷たいものは冷たい。その刺激でぴくりと碧玉の足が揺れた。天祐はまるで碧玉をあやすように、頬に口づける。そうしながら、指先をつぷりと中に入れてきた。

何度行為を重ねようと、この感覚には慣れない。碧玉が眉を寄せたのに気づいたのか、天祐は碧玉自身に左手で触れた。香油で濡れた手でゆっくりと竿を上下にこすられると、反応してしまう。そちらに碧玉が気をとられている間に、天祐は中を丁寧<sup>ほく</sup>に解<sup>ほく</sup>していく。

「……くっ。同時はやめよ」

碧玉はたまらずにうめく。

兆し始めた碧玉自身の亀頭を、天祐がぐりぐりと親指の腹で刺激しながら、中の良い場所をぐつと押したせいだ。

天祐は碧玉自身から手を離すと、代わりに中を責め立てた。

「うあつ、あつ、ううっ。——あ？」

あと少しで達するところで、中から指が抜かれる。

碧玉が恨みがましい目で見たいか、天祐は困ったように笑う。

「言ったでしょう？ 今日余裕がない、と。どうせなら、俺で達してください」

「あつ」

天祐は下衣を緩め、すっかり起き上がっている陽根をさらした。そして碧玉の足をぐいと開かせると、陽根に香油をまわしてから、碧玉のほうへ腰をぐつと押しこんできた。指よりも太くて熱

いものが、碧玉の中に入ってくる。十分にほぐされているので痛みはないが、この瞬間の圧迫感には息がつまる。

天祐は浅い所で陽根を抜き挿しする。良い場所に当たるせいで、碧玉の意識はあつという間にそちらにさらわれた。

最初のうち、天祐はゆっくりと腰を動かしていたが、突然碧玉の腰をつかむと強く揺さぶり始めた。

「ひっ。あ、あつ、急に……っ」

「はあ。兄上の中は気持ちいい」

急にその昂りで責められた碧玉は天祐の肩に爪を立てながら、思わず閉じた目を開ける。天祐は悦に入った赤い顔をして、こちらをらんとした目で見つめていた。一瞬、碧玉は猛禽類ににらまれた鼠の気分を味わった。

「ああつ」

奥を強くえぐられ、碧玉は悲鳴を上げる。強い刺激から無意識に逃げようとする腰を、天祐はがしりとつかんで引きずり戻す。勢いをつけて腰を打ちつけられ、肌が鳴った。

「兄上、逃げないでください」

「うう……」

のけぞった碧玉の喉を、天祐が甘噛みする。

「朝まで離しませんから」

視線と声に執着をじりじりとにじませて言うと、天祐は碧玉の喉をなめ、身を起こす。そして碧玉の腰を押さえて、強く腰を振り始めた。

「あ、あ、やめっ。——っ。あああああ」

先ほど達しかけていた碧玉の体は、やすやすと高みに上らされた。奥を強く突かれ、碧玉はたまらず達する。

そしてそれに遅れて、天祐も碧玉の中へと精を放った。その刺激にも、碧玉は身を震わせる。

(……そんなに嫌ならば、行かなければよいだろうに)

雪深く険しい時期に、家族が——いや、恋人が旅立つのを見送りたい者などいるのだろうか。

碧玉は心に不満を抱えながら、天祐の背をぎゅっと抱きしめた。

そんなふうに一夜を共にして、天祐は明け方に白家を出発した。大きな鳥に変化させた式神の背に乗り、門弟を一人だけ連れていった。

それから二週間後。結局、門弟だけが白家に帰ってきて、天祐が行方知れずになったことを報告したのだった。



「と、いうわけだ」

碧玉が話を終えると、紫曜は目を手で覆って天井を仰いだ。

「碧玉の女装に、美女画？ 見たかった……！」

「わたくしも……！」

黒家の兄妹が悔しそうにつぶやくので、碧玉は眉をひそめる。

「お前達、私の話を聞いていたのか？」

紫曜は慌てて首肯した。

「聞いている。聞いているとも！ それでまさか、その戻ってきた門弟を斬り捨てたのではあるまいな」

「まさか。門弟は天祐から、三日経っても戻らなければ帰るように命令されていて、泣く泣く従っただけらしいからな。天祐がそう命じたということは、黄家にきなくさい何かがあるということだ」

碧玉は腕を組み、ため息をついた。

「本来ならば、私だけで天祐を探しに行くべきだが、私は今や幽霊の身。黄夏礼には嫌われていたし、奴の姉が白碧玉の怨霊で死んだことになっているから、私の生存がばれると厄介だ。かといって、家臣や門弟に黄家を探らせるのは心もとない」

「ふむ。それで？」

「そこで思いついたのだ。白家は黒家に貸しがある、とな」

紫曜の顔が分かりやすく引きつった。

「碧玉、そろそろ年末が近い。何も、このような忙しい時期に助けを求めなくても……」

碧玉はわずかに首を傾げる。

「貴様は『皆に頼られる兄貴』だと自負していなかったか？ お前の親切には、季節が関係あるとは知らなかったな」

紫曜は胸を手で押さえた。

「ぐっ。弱いところを的確にえぐってくる。私とて、無償で助けているわけではない。今後のために恩を売っているし、相談に乗ることで相手の弱みをつかんでもいるのだ」

「お前の二面性など、興味はない。私が知りたいのは、ただ、白家に借りを返す気があるのかどうかだ」

「お、お前ときたらっ。それを持ち出されたら、私が断れないのを知っていて！」

碧玉はにやりと意地悪く笑う。

「なあ、白宗主が行方知れずで困っているのだ。助けてくれ、紫曜兄上？」

「~~~~っ。くそっ。分かったよ！ 碧玉、それ、他の者に言うんじゃないぞ！」

「なんだ、気に障ったのか。お前がやたら兄貴と自称するから、呼んでやってただけなのに」

「逆だ！ 私には効きすぎるから、多用するな！」

なんとも素直な返事をする紫曜を眺め、碧玉は呆れる。

「お兄様、ちよろすぎると思いますわよ」

雪花がぼそりと言った。碧玉も深く頷いた。

紫曜は年の暮れが近いから早めに終わらせると宣言すると、急いで旅支度を整え、翌日には黒家を出発することになった。

綿のような雪が降る中、黒家の宗主夫妻と雪花がわざわざ門前まで見送りに来てくれたので、碧玉は拱手をして丁寧な礼を言う。

「黒宗主、黒宗主夫人、忙しい時期に紫曜をお借りする無作法をお詫びいたします」

黒輝は四十代の、いかにも真面目そうな小柄な男だが、その紫の目は鋭く、宗主らしい威厳がある。療養が効いているのか、以前よりは病の気配が遠のいているように見えた。彼は亡き親友、青炎の息子である碧玉に、親しげに微笑んだ。

「構わぬ。白家に恩返しをする良い機会だ。だが、くれぐれも無茶はしないように」

「ええ、気を付けます。天祐を連れ戻しましたら、共にあいさつに伺いますので」

「ああ。だが、この辺りは年始以降、雪で往来が厳しくなる。春になってから、顔を見せにおいで。庭で花を眺めながら、茶会でも開こうではないか」

「楽しみにしております」

輝が決して社交辞令を言っているわけではないと感じ、碧玉は頷いた。

黒宗主夫人である桃春麗は、黒家を悩ませていた九尾の問題が片付いたおかげか、以前のようなぴりぴりした雰囲気はなく、穏やかに微笑んでいる。

「紫曜に薬草や薬を持たせましたから、何かあったら頼りにしてくださいね。紫曜、しっかりと護

衛するのですよ」

医学や薬草学に詳しい桃家の人間らしい気の遣い方だ。

母に念押しされた紫曜は少しばかりおどけた様子で問う。

「ええ、承知しておりますとも、母上。でも、息子のことも心配してくださっても良いのでは？」

「あなたがふらふらしているようで、その実しつかりしているのは、この母は十分に承知しております。それでも、雪の中を行くのです。風邪にはお気を付けなさい」

春麗は心配そうに言つて、狼のものらしき灰色の毛皮を、紫曜の肩にしつかりと巻き付けた。紫曜は母の気遣いに照れているのか、はにかんだ笑みを浮かべている。

「ありがとうございます、母上。それでは行つて参ります」

「お兄様、無事のお帰りとお土産をお待ちしておりますわ。それから、焼餅を作りましたので、道中でお食べになつて」

「ははっ。分かつたよ、雪花。おやつもありがとう」

ちやつかりと妹に土産を頼まれ、紫曜は笑つて返す。

そして、黒家が用意した馬車に、碧玉や灰炎も乗りこんだ。白家の馬車には、古なじみの老医者や天祐の侍女である青鈴、白狐の雪瑛せうえいを乗せている。他に使用人や門弟が六人、馬や徒歩で随行する。他の者達も同行したがつたが、雪道を行く厳しい旅なので最低限の人数におさえた。その代わり、主が不在となる白家を守るように、厳しく言い含めておいた。

「紫曜、私と灰炎をお前の馬車に乗せてくれるのはありがたいが、お前が連れて行く使用人は一人

でよいのか」

馬車は四人乗りだ。碧玉が白家の馬車で行くよりも、黒家の知人を装うほうが黄領では目立たないだろうという、紫曜の采配によるものだ。もちろん、黒家の馬車の近くには十人の家来がついている。紫曜の隣にいる賢そうな青年が、碧玉に拱手をした。

「ああ。この男は丹青たんせいといつて、私の側近だ。器用な者で、家業の補佐から身の回りの世話までなんでもこなすぞ」

丹青は黒い髪を青い巾きんで結っており、キリツとした青灰の目を持つ小柄な男だ。二十二歳である碧玉と紫曜より、いくつか年上に見えた。青地に灰色の襟がついた衣を身につけており、その上に紫曜のものに比べれば質は劣るものの、獣の毛皮を羽織っている。使用人として大事に扱われているのが分かる。

「丹青と申します。ご用事がありましたら、何なりとお申し付けください」

「そうか、丹青。この男は私の側近の灰炎だ。こやつが困っていたら助けてやつてくれ」

碧玉が灰炎を示して紹介すると、丹青は驚いた様子で目を丸くした。

「どうした」

「は。いえ、その……」

碧玉の問いに、丹青は途端にしどろもどろになってしまった。灰炎が笑つて口を挟む。

「主君が私のことを頼んだので、驚いたでしょう。一介の使用人に、そのようなことを言う主人はあまりおりません」



「一介ならば、な。そなたは私の側近だ」

「ええ、分かっておりますとも。ありがとうございます」

灰炎はにつこりした。紫曜はやれやれと首を横に振る。

「碧玉が冷たいくせに配下に慕われているのは、そういうところがあるからだな」

「紫曜、外ではその名で呼ぶなど言ったはずだが」

「ここにいるのは事情を知っている者だけだろう」

「その調子でうっかり外でも呼ばれては困る」

「分かったよ、銀嶺。なあ、灰炎殿だけでなく私にも少しくらい優しくしてくれてよいのだぞ」

「何を言っている。そもそも灰炎に優しくした覚えなどない」

碧玉が眉をひそめると、紫曜は灰炎をちらつと見た。

「え、これ、本気で言ってるのか？」

「配下<sup>アライ</sup>が滞りなく仕事ができるように取り計らうのも、主人の務めだ。優しさではない」

碧玉がため息まじりに付け足すと、灰炎がうんうんと頷いて言う。

「そして、功績や仕事に見合った報酬をくださいます。効率がいいからと、休みも用意していただきますよ」

「ふーん？　そういえば、お前が宗主になってから、白領では業務の効率化が進んだらしいな。移動中は暇だし、銀嶺、ぜひとも私に領地運営のコツを教えてください」

「大したことはしておらぬぞ」

碧玉はそう返したが、紫曜が子どものようにせがんでうるさいので、質問には答えてやった。



黒家からは雪道をゆつくりと南下した。この時期にしては珍しく晴れが続いたおかげですんなりと移動でき、黒家を出発して五日目の夕方には、黄家の本拠地である琥珀壁<sup>こはくへき</sup>に到着した。

黄領は七隣国<sup>ななりんこく</sup>の南東に位置しており、黒家や白家に比べれば暖かい地方だ。山頂部は雪で白く染まっているものの、街道には雪はほとんどない。

芸術に特化した黄領では、一年を通して何かしらの品を作っている。家からほぼ出られない冬季は、糸つむぎや刺繍に精を出す者が多く、あちらこちらの店先に美しい見本が掛かっていた。

宿の前で馬車を止めると、紫曜はすぐに下車して、碧玉を振り返った。

「やっと着いた。見ろ、銀嶺。西日が当たると琥珀<sup>こはく</sup>に輝く、美しい壁だ」

「ああ。琥珀壁<sup>こはくへき</sup>と呼ばれるだけはあるな」

顔の上半分を木製の仮面で隠した碧玉は、馬車を降りて紫曜に促された方向を仰ぎ見る。町を両側から挟むようにして、絶壁が立っている。普段は茶色い岩肌が、夕日を浴びると琥珀<sup>こはく</sup>のように光り輝くのだ。

「黄領に来るのは初めてか？」

「否<sup>いな</sup>。妖邪退治で国内を駆け回っていた時に来た」

碧玉は紫曜に一步近づいて、声をひそめて話す。

「琥珀壁は初めてだが、東のほうの山間部には行ったことがある。先代は黄家の一族が住む範囲しか守っておらず、山間部では民が妖怪の犠牲になっていたのだな」

「先代は、噂通りのお人だな」

紫曜は愚か者とは口にしなかったものの、皮肉げにゆがめた口元からは真意が伝わってきた。

「だというのに、黄家の面子をつぶすなど、宮廷で黄公子に嫌味を言われたことを思い出した」

「はあ？ そこは礼を言うべきところじゃないか？」

「だから、私はあれとは仲が悪いと言っているだろうが。正体がばれては、何をされるか分からぬ。すでに死んでいる者を殺しても、罪にはならぬゆえ。そうでもなければ、お前に助けを求めたりはせぬ」

碧玉はうんざりのため息をつく。

「こんなことなら、天祐についていくのだった。まったく、あやつめ。弟のくせに、兄をはらはらさせおつて。せめて後継者を決めてから行方不明になってほしいものだ」

「おい、銀嶺。心配のしかたは、それで合っているのか？」

「大事なことだ」

「まあ、それは分かるが……」

碧玉と同じ家の後継者という立場だからか、ひとまず同意したものの、紫曜は複雑そうな表情を隠さない。

「とりあえず、この宿はまるごと我が家が借りあげたから、準備は使用人に任せて、俺達は酒樓に行くぞ。あそこにある明月楼は魚料理が美味いんだ」

「そうか。私は灰炎の料理でいい」

碧玉がにべもない返事をして宿に入ろうとすると、紫曜が前に回りこんで止める。

「おいおい、まずは情報収集すべきだろ！ 黄領で美しいものに詳しいときたら、妓女に決まっている。美味しいものを食べながら、雑談すればいいだけだ」

「紫曜、お前が遊びたいだけではないだろうな」

「今の黒家にそこまで余裕はないさ。そもそも、質実剛健が我が家の流儀だ。だが、黄領は黒領の隣の領地だし、交易が盛んだ。私は黒家で作った法具や黒領の特産品を取引するために、たまにこの町に来るんだ。黄家は派手なことを好むし、流行にも敏感だ。宮廷の流行をいち早く取り入れるのは、貴族の夫人と妓女なんだよ。だから馴染みの酒樓で食事しながら、妓女と雑談をして情報を仕入れているというわけさ」

「金なら出してやるから、お前一人で行けばいい」

「碧……銀嶺も一緒になければ意味がない」

碧玉は紫曜の意図が読めず、紫曜をじっと見つめる。

「お前、自覚はないだろうが、仮面をしていても高貴さはまったく隠せていないぞ」

「何が言いたい」

「美しさというのは、容姿だけで決まるものじゃない。ちょっとした所作やまとう空気に表れるも

のだ。お前を連れていくだけで、妓女<sup>ぎじょ</sup>の目つきが変わるだろう」

碧玉はわずかに首を傾げる。

「お前も黒家の後継者ゆえ、育ちは良いだろうに」

「宮廷作法に詳しい緑家から嫁いでこられた、翠花様仕こみだぞ。お前のほうが洗練されている」

「……なるほど」

遠回しに母親の翠花を褒められたので、碧玉は気を良くした。

それに、納得したのだ。緑家は豊穡の異能を持つ。この異能を持つ者が帝になると、国全体に影響が広がるため、七家が帝を選ぶ際に帝の候補者として選ばれやすい。そのため、緑家の人間が宮廷の作法に詳しいのは、七璃国<sup>ななりこく</sup>の者ならば誰でも知っていることだ。

「私が行けば、妓女<sup>ぎじょ</sup>の口が軽くなるのだな？」

「そういうことだ。さあ、行くぞ」

宿の支度は他の者に任せ、それぞれ灰炎と丹青だけを連れて、雑踏を歩き出す。

明月楼<sup>めいげうろう</sup>は朱色に塗られた三階建ての楼閣<sup>ろうかく</sup>で、近づくと中から優美な楽<sup>がく</sup>の音が聞こえてきた。

呼び込みをしていた下男が目ざとく紫曜に気づいて、深々とお辞儀をする。

「これはこれは、黒家の若様ではございませんか。冬のこの時期にいらっしやるとは珍しいですね。商談ですか？」

「久しぶりだな。まあ、そういったところだが、今日は友人をもてなそうと思ってな」

「ほほう」

下男の値踏みするような視線が鬱陶<sup>うつとう</sup>しい。碧玉がじろりとにらむと、下男はすぐみあがった。

「失礼いたしました。どうぞ中へお入りください。満月の間にご案内いたします」

下男に案内されて二階の広間へ入ると、すぐに紗<sup>しゃ</sup>のかかった丸窓が視界に飛び込んできた。屏風には山の雄大な景色が描かれ、大きな陶磁の壺には白梅が飾られている。どうやら満月を眺める優雅な味わいを感じさせたいようだった。

碧玉は部屋を眺めるなり、ため息をついた。

「紫曜、ここは中級程度の部屋か？ 田舎貴族が宮人を気取ったような、鼻につく広間だな」

下男の表情が凍りついた。紫曜も口元を引きつらせ、碧玉の脇を小突く。

「おいっ、ここは最上級の広間だ」

碧玉はげげんに思っ、紫曜を見やる。

「そういう冗談は嫌いだ」

「嘘は言っでないぞ！」

碧玉はすでにうんざりしている。白家の屋敷に帰りたくなった。

「はあ。宿で灰炎と茶を飲んでいるほうがましだ。香を焚けばいいというものでもない。これでは、くさくてかなわぬ」

広い袖ですつと鼻を覆い隠し、碧玉は首を横に振る。

「お前な。来て早々、追い出されるぞ！」

「紫曜、悪いことは言わぬ。お前も黒家の後継者候補ならば、もう少しましな酒楼<sup>しゅろう</sup>と懇意にするの

だな」

「本気で助言しているだけに、性質が悪いな」

灰炎が傍に来て、碧玉に声をかける。

「主君」

「おお、灰炎殿がいさめてくれるのか」

「体調が悪くなつてはいけません。宿に戻りましょう」

「お前達主従はそうだよな！ 期待して損した！」

紫曜は頭を抱えてうめく。

そこへ、四十代ほどのふくよかな女が顔を出した。華やかな花の刺繍が入った赤と白の襦袢をまとっている。

「ほほほ。お客様、面白いことをおっしゃいますのね。どの辺りが、田舎貴族が宮人を気取ったよ  
うなのかしら」

「お、女将！ 銀嶺、明月楼の女主人の臙雲だ」

紫曜は臙雲を紹介し、小声で「根に持たれているぞ」と付け足した。

「私は雲銀嶺だ。そうだな、女将。何もかもだ」

碧玉はにべもなく言った。女将の柳眉がピクリと動く。

「そもそも、山野で満月を見るなどと気取っているのがおかしい。黄家の若君はここに来たか？  
私の予想では、あの若君は新しい物好きゆえ、一度は噂の酒楼を見に来たことだろう。だが、その

後は来なかったと推測するが」

「……その通りですわね」

紅を刷いた唇が、悔しげにゆがむ。

「女将、私は回りくどいことは嫌いだ。私が助言する代わりに、情報を一つ寄越せ。どうだ？」

碧玉は単刀直入に言っただけだが、臙雲は恥をかかされたと思ったのか、眼差しに敵意が浮かび、  
顔が紅潮していった。

「雲家など聞いたこともございません。七大世家の若君でもないのに、どうしてその助言があてに  
なると思えますの？」

臙雲は分かりやすく嫌味を言った。

碧玉は鼻を鳴らす。貴族を相手にするならば、感情は隠すべきだ。この様子だけでも、主人の品  
格が分かる。

「ふん。酒楼の女主人ならば相手がどんな人物か、ある程度の嗅覚は働くかと思ったが、そなたの  
勘はその程度のものか。紫曜、ここでの情報は期待できぬゆえ、帰るとしよう」

碧玉は灰炎に指で合図をして、食事代に当たる銀子を払わせた。臙雲は気前の良さに絶句してい  
るが、碧玉からすればただの情報代に過ぎない。

「おい、銀嶺！ お前ときたら、最悪だ。私の楽しみの場を一つつぶすとは！」

「私はお前にがっかりした。趣味が悪いのではないか。この程度の店ならば、大した情報も得られ  
まい。黄家の若君が一度しか足を運ばなかったと分かった時点で、とんだ無駄足だ」

碧玉はすたすたと階段を下りていき、通りに戻った。  
そして、周囲を見回して地味な雰囲気しゅめいの酒楼しゅうろうを示す。

「あそこが良いな」

「ええ？ 少しばかり地味ではないか？」

「見かけの派手さで選ぶものではない。この町には良いものがあるのに、なぜ、わざわざ風流ならば月だろろうという安直な題材で部屋を作る？ 本物を味わえば良いだけだ」

「どういふことだ？」

紫曜の問いに、碧玉は再びため息をついた。

「紫曜、お前が私を連れていくと決めた判断だけは、賢明だったと褒めてやろう」

「なんでそんなに上から物を言うんだよっ」

紫曜はむすつとしているが、碧玉は無視して、壁観へきかんと書かれた酒楼しゅうろうに入った。



壁観へきかんは静かでしっとりとした雰囲気をした酒楼しゅうろうだった。

一階にはいくつかの円卓が置かれており、客が酒と食事をめいめいに楽しんでいる。部屋の隅では、あでやかな妓女ぎじょが琵琶びわをゆったりと奏でていた。

「なあ、老人が好きそうな店じゃないか？」

紫曜がひそひそと言うのを無視して、碧玉は下男に声をかける。

「一番良い部屋に案内せよ」

下男は困ったように眉尻を下げて断った。

「申し訳ございません。本日はすでにご予約がございまして……」

「灰炎」

碧玉が灰炎を呼ぶと、灰炎はすぐさま銀子の入った袋を開けて下男に見せる。

「主君はこれでは不足かと仰せです」

「金銭ではございません。お約束があるのですよ。その……」

下男は言いよどんだ。商人にとって、はぶりのいい新規客は大事なものだ。それよりも優先するということとは、この町の権力者だろうと碧玉は思っていた。

「もしや黄家の若君か？」

「……どなたかとは申せません」

下男が一瞬だけ目を瞠みはったので、碧玉は予想通りだと察した。

「ふむ。では、次に良い部屋はどうだ。琥珀壁こはくへきが見えれば構わぬ」

「ご案内いたします」

下男が受け入れたので、碧玉は満足した。

案内されたのは二階の端にある部屋で、広間ではなく、少人数向けのものだった。大きな丸窓の障子戸は開き、薄闇にぼやけ始めた琥珀壁こはくへきと空が見えている。その窓の前には螺鈿細工らでんの卓と椅子



が置かれていた。一見質素だが、最上級の家具だ。

通りの喧騒も遠く、まるで違う土地にきたような気分さえなる。座布団に腰をおろすと、ほのかに花の香りが漂った。

「ふう。落ち着く場所だ」

先ほどの下男が手早く用意した茶器を灰炎が受け取り、丁寧な所作で給仕をする。碧玉はそうやって尽くされるのが当然という態度で、なんの気負いもなく茶杯を手に取った。その様子を見て、下男がほうと感嘆のため息をつく。

「お前、良い部屋を選んだな。――灰炎」

「はい、主君」

駄賃用に、懷紙に包んだ銀子を用意してある。灰炎はそれを一つ、下男の手に握らせた。下男の目がきらりと光る。碧玉は紫曜を示した。

「こちらは黒家の若君でな。この辺りの魚料理が恋しいらしい。良い酒とともに、適当に持つてまいれ」

「畏まりました。旦那様のお好みをお伺いしてもよろしいでしょうか」

「灰炎」

「は。私のほうで対応いたします」

碧玉は下位の者と長々と話す気はないので、灰炎に任せた。灰炎も慣れたもので、名前を呼ぶだけで碧玉がしてほしいことを理解して、下男と共に部屋を出て行った。残った丹青は入口の傍に

立って、護衛をしている。

「相変わらず、面倒くさがりだな」

紫曜がぼそりと言って、茶杯をあおる。

「お前が誰とでもしゃべり過ぎなのではないか」

碧玉は大帯に差している扇子を抜き、ポンと手の平を叩く。

「この店ならば、黄家の情報も聞けるだろうよ」

「初めてこの町に來たお前が、どうして一目で見抜けるんだ？」

紫曜は茶托に茶杯を戻し、納得がいけないといった様子で腕を組んだ。

「本物を味わえば良いと言っただろう。美しく輝く琥珀壁を満月に見立て、内装もそちらを引き立てるものにすれば良いだけだ。あのように美しいものが傍にあるのに、なぜ形だけの空虚な月を愛でるのか意味不明だな」

「うぐっ」

「それに加え、黄家にとって琥珀壁は特別な地だ。彼らはこの辺りで先祖代々、絵の具や宝飾品の石を採掘してきた。異能を授けられるきつかけとなった誇りある場所であり、富と権威の象徴でもある。あれを眺めながら飲む酒は、あの家の者にとって、さぞ格別であろうよ」

紫曜は頬を指先でかいた。

「ああ、なるほど。私が天声山を見て誇らしく思うのと、同じなのだ。派手好きな黄家の連中にとって、流行の店ならばいいのかと……」

「芸術のことは、私もそこまでは分からぬ。だが、美にこだわるならばきつとこうだろうとの予測は立つ。念のため、黄家が喜びそうな貢ぎ物も用意してある」

「いったいどういうものだ？」

「最近、我が家がいり上げた刺繍師がいてな。明明という者だが、素晴らしい才を持っている。天祐が私にと作らせたものだが、一度、袖を通して見せたことだし、手放しても構わぬだろう」

紫曜はごくりと唾を飲んだ。

「お、おい、いいのか？ 天祐殿からの贈り物を粗末に扱ったら、さすがにあの温厚な男も怒るんじゃないか？」

「そもそも、あやつが行方不明にならなければ良かったのだ。これより上のものとなると、先祖伝来の古物や、母上の嫁入りの品になる。遺品を手放すほうが、後々厄介だ。恐らく黄家の審美眼ですぐにばれるゆえ」

「まあ……そうだな。そちらのほうが危険だ」

紫曜はしかつめらしく頷いた。

「無名の天才刺繍師の作品ということか。むしろ、新しい物好きの黄家にはうってつけだろう。黄夏礼殿と仲が悪いというくせに、やけに詳しいな？」

「後継者教育を受けた身ゆえ、これくらい知っていて当然だ」

「それを言われたら、私の立場が無いではないか」

「お前といい天祐といい、どうして芸事が不得意なのだ？ 紫曜、お前は字が上手いし、詩歌だっ

て得意だろう。だというのに、こういう機微になると途端に目が曇る。どういうことだ」

「私のほうが知りたいよ！ というか、お前みたいになんでもこなせる者のほうが少ないんだ」

紫曜はすねたように言い返す。

「あいにく、私が最も欲しかった霊力はさほどなかったがな。どうでもいいことばかりできて、大事にしていたものは失った。そして、このさまだ。何がいいのだか」

碧玉が自嘲まじりにつぶやくと、途端に紫曜はおろおろし始める。

「お、おい、何もそこまで言わなくてもいいだろう？ 私が悪かったよ」

紫曜は心配そうに碧玉の様子を窺う。

「相変わらず淡々としているから気づかなかったが、お前、天祐殿のことでかなり参っているようだな」

碧玉は茶杯に入っている茶を見下ろした。

「……最後の家族まで失うわけにはいかぬ」

碧玉は一度死を受け入れたせいか、自分の死にはさほど興味はない。だが、天祐に対しては生きていてほしいという執着がある。

「生きていると思うか？」

「白碧玉の怨霊が黄夏礼の姉を殺したから、それを恨んで、弟である天祐殿に手をかけるってことか？ 先代ならともかく、現宗主はそこまで馬鹿ではないと思うぞ。美に執着しているわりに、俗物的だ。恩を売るほうを選びそうだが」

紫曜の考えでは、夏礼は周りから自分がどう見えるか気にするわりに、利益にもこだわる商人寄りの気質だという。

碧玉は素朴な疑問を口にした。

「そういえば、黒家の後継者候補が行けば、すぐに会わせてもらえるのではないのか？」

「何があるか分からないから、先に情報収集をするんだ。黄家は特殊でな。重要な決定を除いて、政治的なことのほとんどを家臣に任せ、主家は芸術活動に専念している。滅多に人前に出ないことで黄家の神秘性を高めて、価値を上げているわけだ」

紫曜の説明が、碧玉にはよく分からない。

「そもそも、貴族には滅多に会えぬものだが」

「それでもお前は仕事ならば家臣と会うだろう？ 祓魔のために外出もする」

「まさか、黄家の連中は領内の視察すらせぬのか」

碧玉は呆れた。領地の視察をして、自分の目で確認するのは大事なことだ。そこを任せている者が悪政を敷いていないか確認することもできる。

「ああ。冬の間は門を閉ざしている始末だ」

「来客も追い払うのか？」

「だから、黄家の人間に会うには、彼らの関心を惹く何かが必要なんだよ。緑家や青家の富豪が相手ならば、喜んで会うのだろうが……」

「いくら芸術に長けていても、買う者がいなければ生活できぬからな」

「そういうことだ」

碧玉はううむとうなる。

「私が今も白宗主であつたら、銀子を積むだけで良いから楽であつたのに」

「お前が白宗主だったとして、嫌われているなら、会ってくれるか怪しいものだぞ。お前の言う様子なら、黄夏礼殿はここぞとばかりに嫌がらせをしそうなものだ」

「それもそうか」

碧玉は再び扇子で手を叩く。

「偶然とはいえ、どうやらここに黄夏礼が来るらしい。あいさつしたいと言えば、さすがに拒否はせぬだろう。紫曜、後で行ってこい」

「門前払いが関の山だ。では、こうしようか」

「何？」

「当初の予定通り、妓女ぎじょを呼ぶ」

「それで？」

「良い女を横取りされたら、黄家の若君もこちらに興味を抱くさ。俗物的な奴だと言っただろ」

紫曜は悪い笑みを浮かべている。

「それで天祐の行方が分かるならば構わぬさ。こういう時のための金だ」

そして碧玉も、にやりと笑う。

悪だくみをする主人達の傍らで、丹青は見ないふりをしていた。